

タウンミーティング 対談要約

テーマ：環境の環は環(わ) ひとの環のまち いちか環をつくろう

ゲスト：野口健氏 (アルピニスト)

日時：令和2年2月2日(日) 午後3時～3時40分

場所：行徳文化ホール I & I

参加者：約110人

野口健氏の講演を聴いて

市長：

野口さん、ありがとうございます。大変良いお話でした。

私、最初の挨拶でお聞きしたかった答えというのは、お話の中にあっただと思いますが「何故で山に登るんですか」という話は、山に登ったことのない人に山の楽しみを知っている人が語ったところで詮のないこと。だから「そこに山があるからだ」という趣旨のことを私が大好きな開高健という作家が言っていて、つまり、はぐらかしだと。山の楽しみが分からない人にそんな話してもしょうがない。凍傷になりかけたり、滑落して死にかけたり、危ないところに何故わざわざ出かけていくのか。それが分からない人に、そういう話をしてはいかんのだと言っている。

もうひとつ、植村直己さんの話をしていましたが、開高健はもう一つ興味深いことを言っていて「植村直己は笑いながら死んでいったに違いない」と言っている。男の熱中することは危機と遊びだと、遊びの中に危機がある、危機の中に遊びがある。つまり一番危ない場面で男というのはファイトが沸いて楽しめる。先ほど谷川岳のことを話されていましたが、一番ヤバイときにジャンケンして「先に行け」とか、タバコ吸って落ち着かそうと。そういう瞬間が男にとって一番大事だと。男を男たらしめる情念だということを開高さんは言っている。

もうひとつ、市川が生んだ偉大な人物に星野道夫さんがいて、先日、星野道夫さんの奥様が星野さんの残された写真の数々を市に寄付してくださった。実は星野夫人に同じ質問をしました。「星野さんが亡くなったときにどう思われました」と、ちょっと失礼な質問でしたが。奥様は「亭主は好き好んでそこに行って、あえてヒグマが出た場面でもカメラを離さなかった」と「やっぱり亭主は幸せでした」という趣旨の話をされていた。なるほどなあと思ったわけです。いかがですか。

野口氏：

確かにヒマラヤは危険で、いろいろな方に「何故、結婚して子どもができたのに危険なところに行くのか」と聞かれます。2011年のエベレストで雪崩に遭って脊椎を痛めて、難しい手術をしました。しばらく山に行けなくて、いろいろな方にヒマラヤとか行かないで時間があるし、そこに使っていたエネルギーを日本での活動に使ってはどうかと。これはヒマラヤをやめる良いきっかけになるのではないかと思います。「ヒマラヤやめるか」と思った時期があり、数年離れました。そのとき何が起きたかと申しますと、毎年ヒマラヤに通っていて、実はヒマラヤでエネルギーを吸収していたのです。自分のタンクがあって、そこにエネルギーを満タンにして帰ってきて、そのエネルギーを使いながら日本での活動をしていたのだと、そのとき気付いた。ヒマラヤをやめたときに日本での活動のモチベーションがなくなってきて、どこかで義務だと思わなくてはいけなかった。気力がなくなって富士山の清掃もいろいろな活動もやりたくなくなってきました。想いが、感情がどんどん弱くなっていく。一昨年くらいからまたヒマラヤに登って、去年も行って今年も行きます。吸収するところですね。

市長：

山が内製する場所で、なにかエネルギーを貯める場所だというのは、とても頷けます。実は私、溪流釣りが趣味で。私、長いこと失業をしまして。政治家ですから選挙があつて落選すると、同じような問題がありました。ひどいときは背広着て朝早く出て「活動してきました」と言って山で釣りをしていました。つまり逃げ込んでいるわけです。山に行つてとりつかれた様に竿を出しますが、いろんなことを考えてしまって、ぜんぜん釣れない。逃げ込んで、なにか内製して貯めようとする場所だということはすごく頷けますが、どこで開放されますか。海は行きませんか。

野口氏：

海は一時期潜っていました。ただ、僕の中では海のほうが怖い。潮に流されて、ほかのメンバーとだいぶ離されて浮上して、ボートが見えなくてしばらく一人で1時間ぐらいプカプカ浮いていたことがあって、海は手を出してはいけないなと思いましね。

市長：

海の中で溺れかけるとか、流されて帰って来られないとかは危機的状況そのもので、冒険家や登山家はそういうことも楽しいのではないですか。

野口氏：

山と海、どちらかにしないと。山は危険なので、山以外の危険なことにいかに手を出さないか。スキューバはハマります。夜間もダイビングするとか、海の中の洞窟も夜間とか、どんどんそちらに入っていきます。楽しいです、そのドキドキ感が。例えば、一回しか死ねないですよ。これが十回死ねるのなら、一回海で死んで、一回ヒマラヤで死んで、一回家で死んでとかありますが、一回しか死ねないので、死に対して身近過ぎてすごく敏感です。

市長：

一回しか死ねないというのは至言ですね。噛み締めなきゃいけない言葉です。

質問が溜まってきましたので、この辺にしておきますが、やはり山にごみがあるから山に登るということはありますか。

野口氏：

富士山の清掃は言った手前があり、引くに引けません。最初の数年間はなかなか参加者が集まらず、地元から厳しい意見がワーッと来たときに本当に嫌になりました。車を運転しながら富士山を見ているときに内心、頼むからボーンと噴火してなくなってほしいと思いました。それくらい最初の4年は苦しかったです。そのあとに全国からいろいろな方が来てくれて、最初は怒鳴ってきた地元の方もいま仲良くごみ拾いをしています。本当に活動というのは、じわーり・じわーり行くと広がっていきます。ですから最初は20代の半ばですし、焦るし、急ぐし、どうしてみんな分かってくれないのかとイライラもしました。ただ20年続けてゆっくりと広げて行ったほうが確実に変化があると思って、変化を急がなくなりました。

市長：

富士山は普通の人やけしからん業者が樹海にごみを捨てていますが、ヒマラヤは普通の人のごみを捨てに行けない。つまり登山者がごみを捨てている。昔はそれで良かったけれども、見直すようになってきた。継続してヒマラヤのごみ拾いをされていて、国際的にヒマラヤのごみをなくしていこうという動きが広がって行く見通しはありますか。

野口氏：

ヒマラヤはすごく変わりました。20年前にネパールの首都カトマンズでエベレストの清掃を始めるとき、記者会見でどういう質問があったかという、ネパールはカーストの影響が今より強くて、これは表現が難しいのですが、ネパールの社会においてごみを集めるというのはカーストが低いのです。僕がエベレストでごみを拾うと発表したとき、記者の方はカーストが高いので「お前はカーストが低いのか」という質問が平気で来ました。一緒に活動するシェルパたちはカーストが真ん中です。シェルパたちに一緒にエベレストでごみを拾ってくれとお願いしたときに、彼らはごみを拾うことに非常に最初は「んー」となりました。それでも相当頼み込んで「それではやろうか」と、最初はそういう感じでした。シェルパたちを僕が雇って、彼らは仕事で約2カ月間、8千メートルまで上がってごみを拾っていました。それを2年・3年続けると、シェルパ達がごみに敏感になってきます。シェルパたちが村に帰ったら村がゴミだらけで、皆ポイポイ捨てていく。一緒にごみを拾ったシェルパたちは、ごみに敏感になり村の清掃を始めました。そして「ごみをみんなで拾おう」と小学校を回る活動をシェルパたちが始めました。

4年たったとき、彼らが「来年から俺らがやる」と言われてバトンタッチしました。そのシェルパの一人が国連などいろいろなところに情報発信して、ネパールで有名になりました。エベレストでごみを拾う、いわばスーパースターです。それからガラッと変わり各国の登山隊のシェルパたちも皆変わりました。かつてはポイポイごみを捨てていましたが、シェルパたちは休憩のベースキャンプでごみを拾うようになり、外国人登山者がごみを捨てることに注意するようになりました。

ネパールの政府も最初のころはまったくサポートしてくれませんでした。途中から清掃隊に対して国も「入山料の中にごみの処理も入れよう」となり、今は国を挙げて取り組んでいて、富士山より先にエベレストが綺麗になりました。

市長：

ごみ拾いをする、あるいはごみを拾っている人たちの姿を見るとごみを捨てなくなりますね。我々も江戸川土手のクリーン作戦をやっていますが、昔よりよほど綺麗です。

野口氏：

僕は15年くらい前に千葉の鎌取にきました。トレーニングで自転車で九十九里までよく往復していて雑木林の裏道入って行くと、不法投棄がすごかった。富士山も多いけど、千葉も多い。当時、千葉県が不法投棄全国ワースト3位でした。ちょうどそのころに今の知事から「野口さん、観光大使やらない」と言われました。名前だけでは意味がないので、具体的に不法投棄の清掃活動を知事も千葉県の各首長もみなさんと一緒にやることを提案したら「やろう」という話になり、それから15年くらい県内の清掃活動をしています。知事が「10位を目指そう」と言って、今はワースト8位くらいになり、それだけごみが減りました。今年は幕張の海岸へ行きましたが、台風の後だったので海岸はすごかったです。

市長：

ありがとうございます。さて、会場からたくさん質問をいただきました。質問を読み上げますので、ご回答をいただきたいと思います。

「最近のキャンプブームについて、どのように思いますか」

野口氏

キャンプブーム自体は、良いきっかけだと思います。特になぜこれが大事だと思ったのかと言いますと、環境学校の子どもとシーカヤック体験でのことです。海に行くと、まずは浜辺でシーカヤックがひっくり返ったときの脱出練習をします。そして実際海に入って子ども10人がそれぞれシーカヤックに乗って、パンと手を打ったらみんながひっくり返ります。そううち5人くらいは浮上しますが、残りはひっくり返ったままシーカヤックが動かない。「何やってんのかな」と思って、水中眼鏡付けて海の中見たら、ひっくり返ったシーカヤックの中で子どもが目をつむってじっとしていた。パニックにもならず、要するに思考停止というかフリーズです。「しまった」と思って、蓋を取って引き抜いて、抜いて、抜いて、水を飲んでいて危ないところでした。

何故そういうことが起きるのかと思ったときに、自然体験があるかないかです。自然体験がある子は、何か起きたときにパッと岩を掴むとか、何か生命のピンチが起きたときにとっさに体が反応しますが、まったく自然を経験してこなかった子はフリーズしてしまいます。自然体験はプチピンチです。雨が突然降る、着替えがないというようなプチピンチを繰り返すことによって人間の生命力がつくられていきます。

いろいろな被災地を見ていろいろ経験したときに、この国であれば最長5日、自力で生き延びればなんとかなります。最初の3日なり5日をどう自力で生き延びるとき、自然体験は大事なポイントです。キャンプブームというのは、そのような意味では入り口です。

ただ最近のキャンプブームでファッションから始まる。例えば山ガールというのは、女性誌が山と女性ファッションを結び付けて、それがきっかけで女性が山にたくさん来ました。それは良いことですが、同時に思わなくてはいけないのがマナーの問題です。キャンプ場は自然に接しに行くところですが、場所によってはすごくごみを置いて帰る人がいる。そこは違和感を覚えるときもあります。

市長：

ありがとうございます。

「聖地ヒマラヤをごみで汚した反省から罪滅ぼしのための清掃活動をしていると思っています。清掃活動で、今後も頑張ってください」。

野口氏：

人間は自分の過去から逃げられない。僕も21歳のときにボンベを3本置いてきていて、しかもマジックで「KEN NOGUCHI JAPAN」と書いてあったので、バレたらまずいと思いました。ちょうどそのころ私、一年間だけ「違いの分かる男」をやりに来て、コーヒーのコマーシャルですが、あれで僕がエベレストでごみを拾っているシーンがあって、「アルピニスト野口健、彼が次に選んだのはエベレストの清掃登山」というコマーシャルが一年間流れました。山岳関係者から僕の活動の評判が良くなかったのが、日本の山関係者があのボンベを発見して「バレたらやばい」と思って、自分から喋ってしまったら楽になりました。

市長：

来年くらいに見つかることをお祈りしています。

「プラスチックのメリットが大きいですが、プラスチックごみのデメリットが大きすぎる。」

これらのプラスチックの問題をどう考えますか」

野口氏：

プラスチックは確かに便利です。去年、被災地をだいぶ回って特に東北の方で断水して水がないときはペットボトルの水がすごく助かります。ですから全部否定されるものではないと思います。

去年タンザニアのキリマンジャロに行きました。かつてはペットボトルやビニール袋は持ち込みOKでしたが、アフリカは日本より発展途上国でありながらペットボトル持ち込み禁止、絶対ダメ。ネパールもペットボトルのごみが多い。ペットボトルは使えなくなると捨てますから、ごみの大半がプラスチック系です。そういうもので、誰も気にしなかったし。ところがエベレストも今年からペットボトル持ち込み禁止です。

アンナプルナというトレッキングで観光客がたくさん集まる有名な山ですが、そこは5年前からペットボトル持ち込み禁止で、山小屋でフィルターを通した水を買います。いろいろな国を回っていると、日本はそこに関しては対応がすごく遅れています。ただこの問題は十数年前からペットボトルをやめようという話があり、当時はペットボトルのほとんどがリサイクルで再利用しているという話でした。ところが大半は中国へ「資源」として輸出していて、それが、中国が受け入れなくなって、いま日本で溢れている訳です。あのころの説明は何だったのか。

いま水を買って飲む時代になりつつありますね。日本は水道水が世界で最も良いのですが、水を買うという生活習慣になっています。ペットボトルを考えると、僕もかなり飲んでいて、それで自分の家に浄水器を付けたらペットボトルを買うことはほぼなくなりました。それは自分のできることです。

海外の山は、まず自動販売機を置かない。ペットボトルも持ち込みダメ。その代わり山小屋に浄水器を作って、それを皆が水筒を持ってきてチャージする。これを富士山の5合目からやると注目されるでしょうね。アメリカでは、みんな水筒を持って歩いている。アメリカの場合は、水をチャージするところが至る所にあります。多くの人が水筒を持って、いろいろなところでチャージする。ヨーロッパもそうですね。可愛い水筒とかお洒落な水筒がものすごくたくさんあります。それはファッションから始まる山ガールではないですが、デザインの可愛い水筒にチャージして飲むことが「素敵だな」となると、ワッと広がると思います。

市長：

「富士山のごみ収集のようなシンボリックな活動を市川市でやるとしたら、どんなことが考えられますか」

野口氏：

僕は市川市で何年か前に清掃をやりましたけど、国道の信号のところのポイ捨てがすごかったですね。本当に多かったのが、最初、ペットボトルのお茶が捨ててあると思って開けたらオシッコでした。車の中でオシッコをしたらちゃんと捨てれば良いのですが。近くの学校の通学路になっていたのも、そこを子どもに歩いてほしくないなと思い、それで徹底的にごみを拾いました。最も人目の付きやすい道路から徹底的にやっていくと良いですね。

市長

なるほど。ありがとうございます。

「ごみ以外の環境問題で所感はありますか」

野口氏

ごみ以外は、温暖化です。去年の秋、マナスルという8千メートルの山へ行きました。僕らがヒマラヤへ行くときは乾期に行きます。乾期は秋から春にかけてです。寒い時期は本来、雪が少ないので行きます。夏になるとインド洋の水温が高くなって蒸発してヒマラヤに雪が降る。寒いほうが乾燥して雪が降らないのですが、去年のマナスルは一カ月居てほぼ晴れない、ベースキャンプは雨。

十数年前、エベレストのベースキャンプにハエが飛んで来てびっくりしました。いま普通にハエが飛んでいます。ヒマラヤの氷河が解けて流れてくるので、麓は洪水被害が増えています。日本に居るとピンときませんが、ヒマラヤは非常に身の危険を感じます。

ところが一昨年あたりから日本に居ても温暖化で身の危険を感じるようになりました。特に去年の千葉県は非常にそれを感じました。一昨年の広島、岡山は大洪水でした。あれがもし気候変動だとすると、温暖化によって起きる災害となると、これから毎年いろいろ各地で繰り返していく。

毎年日本に来るシェルパが、十年くらい前に言っていたことで思い出したのは、エベレス

トが温暖化で溶けて水害が起きる。彼は日本に来て山小屋で働いていて日本人に「温暖化で氷河が解けて大変だ」と言いますが、日本は氷河がないので日本人はピンとこない。遠い話のようで、あまり聞いてくれない。彼は人間の体と地球を例えて「エベレストが熱を持つということは人間の体でいうと頭が熱を持つ」と話し、「頭が熱を持つと全身がだるくなるよね。だからエベレストが温まって大きな問題が起きているということは、エベレストだけじゃなくて地球全体にこれから来るよ」と言っていたことが現実にそうやってきたなと思うんです。

市長

「市川市でどうやって全国的に展開されているような環境に対する取り組みができますか」という趣旨のとても前向きな質問を多くいただいています。

野口氏

いろいろなところで活動してきましたが、その首長さんが参加される場所は勢いがありますね。

ネパールのカトマンズはごみがすごい。ネパールは偉い人はごみを拾わないんです。カーストの問題で。日本ですと、清掃キャンペーンって、社長さんとかいろんな方がいらっしやいますよね。ネパールはそれがなかったんです。

日本大使にお会いしたときに一つお願いして、日本大使って日本の代表で偉いというイメージがありますから大使に、「一日でいいので大使館の前のごみを拾ってください」と。僕は知り合いの現地の新聞記者に取材で写真を撮ってもらう。「一日でいいから」と言ったら、大使はそれをやってくれました。カトマンズポストという有名な新聞に日本の大使がごみを拾っている写真がドーンと出たら、ものすごくインパクトが大きかった。ネパールから見たら日本は先進国で憧れの国です。その日本の大使がカトマンズの街のごみを拾っているというのが、それが大きなきっかけです。いまネパールでいろいろな会社の社長とか社会的に地位が高い人までが清掃活動を始めました。やはり首長というのはシンボルです。シンボルが市民とごみを拾うというのは、すごく大きいことです。よかったら今度一緒に。

市長

ぜひ道路でやりたいですね。よろしくお願いします。

ありがとうございます。

たくさんご質問いただいていたのですが、しっかり読んで仕事の参考にさせていただきます。

野口さんありがとうございました。